〔駒沢女子大学　研究紀要　第25号　p. 249 ～ 258　2018〕

小学生の保護者が子供の夏休みの自由研究に抱える不安

鞠　子　典　子*

Parents' anxious feeling of supporting their children's summer assignments in elementary education

Noriko MARIKO*

1　はじめに

（1）研究の背景と目的

「夏休みの宿題代行サービスに200件超の依頼殺到中」と題する記事が、主婦と生活社が運営するニュースサイトの週刊女性 PRIME2017年９月5日号に掲載された。この記事は第三者にお金を払って子供の夏休みの宿題をやってもらっている親がいることを報じているが、そもそも親はなぜ代行サービスに頼るのであろうか。最もありうる理由は、子供たちが夏休みの宿題を計画的に取り組めないままに過ごし、このままでは夏休み中に終わらないことが十分に予想される段階になって、親はこれを回避するべく宿題代行サービスに頼るケースである。宿題を夏休み中に終わらせられなかったり、終了間際に取り組んで終わらせたケースは17 ～ 40.9％に及ぶとの調査報告（バンダイ 2013；アクトインディ 2015、2016；eole 2018）もあることから、宿題代行サービスが繁盛するのはこうした夏休みの宿題に苦労する家庭の実態が背景となっているものと推測される。

では、子供たち（以後、本論文で使う「子供」は小学校に通う児童を指す）はなぜ夏休みの宿題に苦労するのであろうか。宿題の量が多いことが原因だとする意見もあるが、宿題の分量が増えたという統計資料は見当たらないためその可能性についての検討は困難である。むしろ、子供とその親たちは夏休みの宿題の量についての感想を求められた際に適切であると答えた割合は、最も多い５割前後となっている（バンダイ 2013）。

そこで、子供とその親が夏休みの宿題に対してどのようなイメージを抱いているかを考えてみることにする。夏休みについて気にかかることの第一位は子供と親の双方が宿題であると答えている（バンダイ 2017）。その一方で、夏休みの宿題は子供に必要だと思っている親は96.8％であり、その必要性や意義については十分に理解しているものと思われる（Benesse 2009）。このジレンマに親は悩んでおり、３割前後の親が「宿題の中には子供の苦手な内容がある」、「手伝わないと間に合わない」、「難易度や危険度が高く、子供だけでは取り組めない部分がある」などの悩みを挙げている（eole 2018）。その結果、親は子供の宿題を手伝う行動をすることになる。いくつかのアンケート調査によれば、40 ～ 77％の親が夏休みの宿題を手伝うと答えているが、多くの親が手伝う際に最も悩んでいる宿題にはダントツで「自由研究」を挙げている（Benesse 2009；ライオン 2013；

*駒沢女子大学 非常勤講師

バンダイ 2013；アクトインディ 2015)。日本能率協会産業振興センターの調査（2018）によれば、実に、9割の親が夏休みの自由研究に「不安あり」と答えている。

自由研究に対して親が抱える不安の中身としては、「子供が自分の力でやりきれるかどうか」(50.0％)、「親がどういうサポートをしたらよいか」(22.8％)、「学年にふさわしい出来栄えかどうか」(12.9％）がトップ３である。このうち、最初の不安は子供が主体であるが、後の二つは親自身に内在する不安である。こうした親自身が抱える不安についての解析は十分になされていない。そこで、筆者は自由研究に対して親が抱える不安について解析するために、かつて小学生だった大学生に対してアンケート調査を行った。その結果をもとにして、親の不安の原因について本論文で考察していく。

（2）自由研究による教育とはどんなものか

アンケート調査結果を論じる前に、自由研究による教育の効果について言及しておきたい。

自由研究とは、学校内外によらず、子供が自らの問題意識に基づきながら方法を考え、主体的に問題解決に取り組む活動のことと定義されているが（山崎・片上 2003)、現行の学習指導要領において、自由研究についての具体的な記述はない。しかし、自由研究の趣旨は子供たちの関心と体験に重きを置いていることから、理科、社会、国語、家庭、図工などの教科にその趣旨が残っており、そのため夏休みの自由研究ではこれらの教科から選ばれることが多い（安藤 2008; 林・三崎 2016)。今日では、文部科学省が推奨するアクティブラーニングに通ずる学習活動であるとして、学校は夏休みの宿題として課すことが多い。

現在のとらえ方からすると、自由研究は２種類に分けることができる。一つは学内を中心として行う課題解決型の探求的学習活動である。これは学校の教師が中心となって指導を行う。もう一つは、子供が自身の興味や関心に応じてテーマを設定し、主として夏休みに宿題として行う自由研究であり、一般に自由研究と言えばこれを指す（佐藤・栗原 2016)。後述するが、とりわけ理科の自由研究は夏休みの宿題の一つとして定着しており、ネットなどでもそれを支援する塾業者のサイトがたくさん出ている。

自由研究を経験した子供たちはどのような力が身につくのであろうか。一つは、自ら興味・関心のある研究テーマを設定できる力である。世の中には不思議に思うものや現象がたくさんあるが、それをそのままスルーせずに、具体的に言葉で表すことである。そうやって、初めて自分が興味・関心のあることとは何なのかを自覚することができる。最近の大学生の特徴は研究テーマを設定できないことだと思っている。理系、文系関係なく、初等教育で教育しなければならない課題ではないかと考える。

２　アンケート調査の方法

（1）アンケート調査の目的

夏休みの自由研究を手伝う親の不安の実態について把握し、不安の原因について考察するためのデータを取ることを目的としてアンケート調査を実施した。調査対象とした大学生は筆者が非常勤講師として勤務する女子大学の学生とし、得られた成果は勤務大学の授業に役立てるつもりである。

（2）回答者の属性

アンケート調査は東京都内の文系女子大学に通う１～4年生の大学生であり、いずれも筆者が担当する生物系の授業を受講する学生であった(表１)。サンプルできた学生数は120名であったが、このうち９名は私立小学校に通っていた。

表１　回答者の属性

調査対象	東京都内の文系４年生女子大学
調査対象者	学年は1～4 年生 私立小学校に所属した学生は９名， その他は国公立小学校に所属
サンプル数	学生120 名

（３）調査の方法

アンケート調査は2018年９月に実施した。アンケート調査の質問内容および回答形式は表２の通りである。

表２　アンケート調査の質問項目と回答形式

質問①	あなたが小学校で学んできた科目に対する興味・関心の強さをお尋ねします。カッコ内に１～１０の数字を入れて、興味・関心の強かった順位をかっこ内に記入してください。	10 個の科目に順位をつける
質問②	夏休みの自由研究を経験した方にお尋ねします。自由研究を行うか、行わないかは、児童の自由意思でしたか、それとも学校が課した義務でしたか。	４つの選択肢から選択
質問③	夏休みの自由研究を経験した方にお尋ねします。各学年でどの分野の課題を選びましたか。覚えている限りで結構ですので、次の分野から該当する番号を表中に記してください。	1 年生から 6 年生までに実施た自由研究課題（5 個の分野で該当する番号を選択）
質問④	夏休みの自由研究の課題を決めるのは誰が多かったですか。次の中から選んでください。	「その他」を含む 6 個の選択肢から選択
質問⑤	夏休みの自由研究を誰かに手伝ってもらった方は、その主たる人物を教えてください。	「その他」を含む 6 個の選択肢から選択
質問⑥	あなたの母親、父親、先生は理系出身ですか、それとも文系出身ですか。わかる範囲でお答えください。	母親、父親、先生のそれぞれに文系出身か，理系出身かを回答
質問⑦	親に指導してもらいながら理科系の自由研究を行った経歴をお持ちの方にお尋ねします。親の指導に満足していましたか。	5 段階の選択肢から選択
質問⑧	親に指導してもらいながら人文科学系の自由研究（国語系、社会系）を行った経歴をお持ちの方にお尋ねします。親の指導に満足していますか。	5 段階の選択肢から選択
質問⑨	夏休みの理科系自由研究を選び、親からの指導があった方にお尋ねします。指導中の親のようすで当てはまるものにすべて丸を付けてください。	7 個の選択肢から選択

３　アンケート調査の結果

以下に、それぞれの質問で得られた結果を順次記す。

＜質問①の結果＞

学生が小学生時代に最も興味・関心のあった科目をまとめたのが図１である。最も興味・関心のあった科目が音楽であり、２位には図工がランクしている。次いで国語と体育がほぼ同程度、さらに算数、理科、家庭科、社会、道徳、生活科となった。

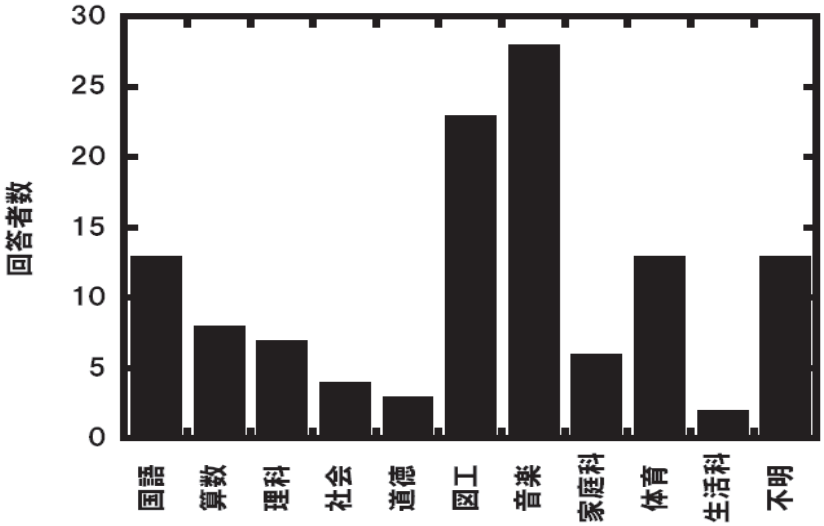

図１　調査した大学生が小学生時代に最も興味・関心のあった科目（n=120）

＜質問②の結果＞

夏休みの自由研究が自由意思により行われたのか、それとも義務として課せられたのかどうかをまとめたのが図２である。圧倒的に多かったのが義務として課せられてたケースであり、全体の８割を超えた。自由意思で決められるケースは14％程度であった。

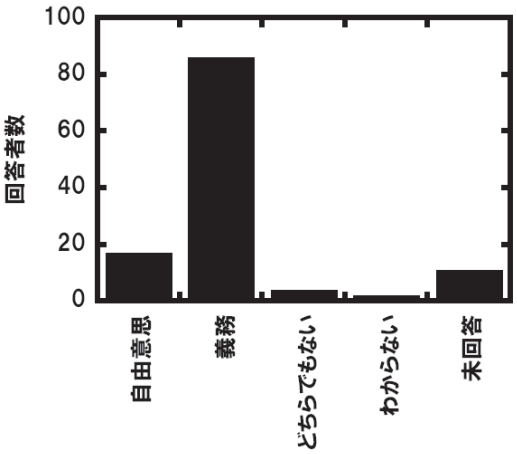

図２　夏休みの自由研究を行うか否かの判断の所在（n=120）

＜質問③の結果＞

表３は大学生が小学校時代に行った夏休みの自由研究がどの分野に属していたのかをしている。分野はBenesseの調査報告書（2009）に記載された分類法を採用し、国語系、理科系、社会系、家庭科系、図工系の５つに分類した。

全学年を通じて最も多かったのが図工系であ

表３　大学生が小学生時代に行った夏休みの自由研究のテーマ

学年	自由研究の全数	国語系	理科系	社会系	家庭科系	図工系	その他*	合計
1	65	1	11	0	4	49	55	120
2	67	1	14	0	4	48	53	120
3	74	0	17	4	6	47	46	120
4	78	2	23	4	13	36	42	120
5	84	2	35	4	13	30	36	120
6	80	2	30	4	12	32	40	120
合計	448	8	130	16	52	242	272	720
割合（%）	100	1.8	29.0	3.6	11.6	54.0		

＊その他：夏休みの自由研究を行わなかったか，あるいは行った記憶がない場合を含んでいる。

り、それに理科系が続いた。この２分野だけで８割を超えたが、学年ごとの傾向は異なった。１～3学年までは図工系が半分を占める勢いであったが、高学年になると３割程度まで減少した。一方、理科系は低学年から高学年になるにつれて増加する傾向となり、５～6年生では図工系とほぼ同レベルとなった。

そのほかの分野では家庭科系が若干あるのみで、国語系と社会系の自由研究を行った学生はほとんどいないことが明らかとなった。また、その他を選ぶ学生もかなり多くいたことから、単純に行ったかどうかを覚えていなかっただけでなく、意図的に自由研究を行わなかったり、学校が義務として課していなかった例が相当数あるものと推察された。

＜質問④の結果＞

夏休みの宿題のテーマは誰が決めているのか、それを示したのが図３である。最も多いのが児童本人とその親が話し合って決めたケースであり、全体の４割を占めた。続いて、３人に一人は自分ひとりで決めていた。意外なことは先生が関与したケースは少ない。

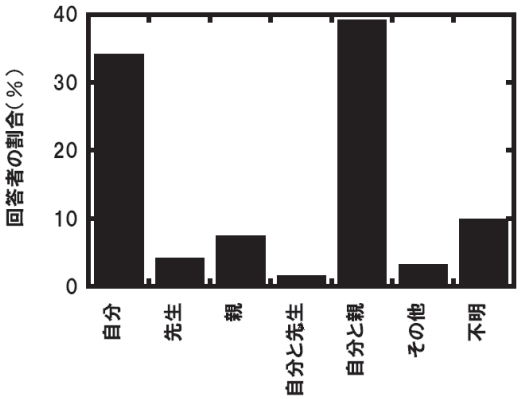

図３　夏休みの自由研究のテーマ決定にかかわった人（n=120）

＜質問⑤の結果＞

先述したように、夏休みの自由研究を子供が完成させるには親によるサポートが必要な場合が多いとされる。そこで、夏休みの自由研究を誰に手伝ってもらったのかを問うた質問に対する回答を図４に示す。圧倒的に多いのが母親であり、全体の４割を超えた。続いて両親と答えた学生が２割程度いたが、２割の半分が母親だとすると、母親への依存度はさらに高いものと見られる。父親単独となると、１割を欠いてお

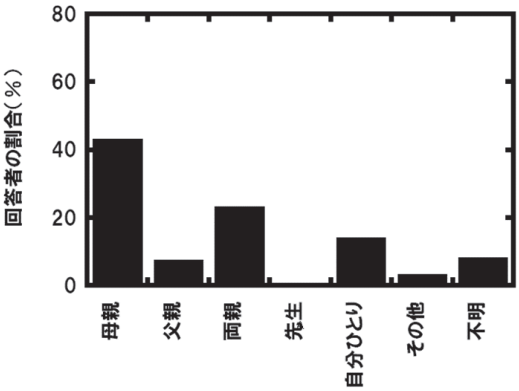

図４　夏休みの自由研究を手伝った人（n=120）

り、両親の半分を組み入れたとしても、母親に比べて父親の介在度が極めて少ない実態が明らかとなった。さらに驚きなのが、先生がサポートしたと答えた学生は一人もいなかったことであった。その理由はどこにあるのか、後ほど考察してみたい。

＜質問⑥の結果＞

質問③において、夏休みの自由研究の８割以上は図工系と理科系に属するテーマであった。また、研究の実施に当たっては親の関与が重要な役割を果たしていることも示した。これらのことから、指導をする親や先生の持っている知識やスキルが文系と理系のどちらを専門としたものであるのかが重要であると考え、質問⑥を設定した。そのアンケート結果を表４に示す。

不明な例も多いが、母親は文系出身者がほとんどとみてよい結果が得られた。また、父親の方は文系と理系がほぼ一対一の比率となった。

表４　親と先生の専門分野（n=120）

出身分野	母親	父親	先生
文系	75	41	32
理系	14	41	7
両方	0	0	4
不明	31	38	77
合計	120	120	120

＜質問⑦の結果＞

質問⑦は理系の自由研究を行った学生がサポートしてくれた親に対してどのような印象を持ったのかを問うている。その結果を図５に示す。質問内容が似ている質問⑦と同様に、未回答が７割を超える結果となったが、やはり不満足と答えた学生は全くおらず、満足であったと答えた学生がわずかではあるがいた。

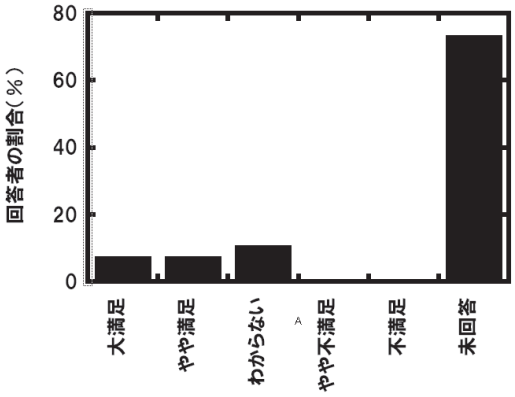

図５　理系の自由研究を行った学生がサポートしてくれた親に対して抱いた印象（n=120）

＜質問⑧の結果＞

質問⑧は文系の自由研究を行った学生がサポートしてくれた親に対してどのような印象を持ったのかを問うている。その結果を図６に示す。回答しにくかったのが、不満足と答えた学生はほとんどおらず、どちらかと言えば満足であったとの印象を持つ学生が多かった。また満足と答えた学生の数は理系よりも多くなった点が特徴的であった。

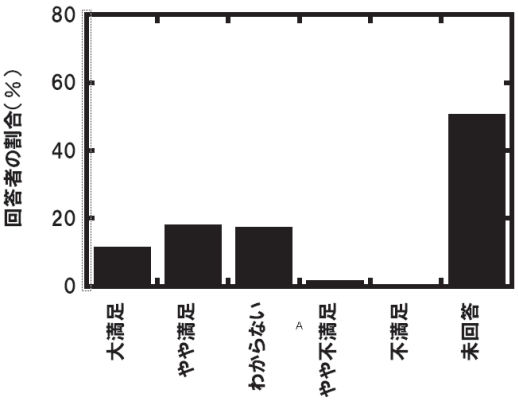

図６　文系の自由研究を行った学生がサポートしてくれた親に対して抱いた印象（n=120）

＜質問⑨の結果＞

夏休みの自由研究を理科系のテーマで行った学生に対して、指導してくれた親がどんな様子であったのかを質問してみた。回答数は67件（複数回答なので実数は60名）と少なかったものの次のような回答がみられたので、以下列挙する。

・優しく指導してくれた	4
・楽しみながら行った	31
・怒りっぽくなった	9
・やりたくなさそうだった	11
・めんどくさそうだった	1
・プレッシャーを感じて不安そうだった	4
・無関心だった	1
・覚えていない	2

内容を見ると、楽しみながらやれたとする学生が多かったが、親の態度が普段よりも悪い印象をもったとする学生も多くいることが明らかとなった。

４．考察

本アンケート調査結果から、小学生のときに興味・関心の授業科目と夏休みの自由研究で選ぶ分野とは必ずしも一致しないことが明らかとなった。音楽に最も強い興味・関心があるにもかかわらず、選んだテーマは図工系か理科系であったことはそのことを端的に示している。同様の結果はいくつかの調査報告書で明らかとなっている（Benesse 2009）。これはおそらくテーマの設定が容易であることに加えて、三年生から理科の授業が始まることが大きな要因となっているものと思われる。

以上より、自由研究をサポートする側の親が子供の要求に答えられるだけの理系の知識やスキルを持ち合わせておく必要がある。しかし、我が国では、科学の基礎的概念の理解度は欧米諸国と比較して低いレベルにあるとされ（科学技術庁科学技術政策研究所 1992；岡本 2008）、子供の要求に答えるだけの自信は備わっていないのではないかと推察される。そのように推察する根拠は、夏休みの自由研究をサポートする主要人物が母親であり、その母親は文系出身者が多いからである（図４、表４）。

平成30年度学校基本調査（2018）によると、大学の学部修了者における理系（理学＋工学＋農学）：文系（人文科学＋社会科学）の比率は１：2.17となっている。つまり、小学生の親のおよそ３分の２が文系出身者である。文系出身者はもともと科学の素養が少ないことを考えれば、理系出身者より理科教育に対する自信はないであろう。さらに、そうした親がその後に新たな科学的素養を身に着ける努力をしないことを考慮すれば（岡本 2008）、自由研究をサポートする親に不安がつきまとうことは想像に難くない。

それでも親が子供の要求に答えられなければ、夏休みの自由研究は完結しないであろう。海野・安藤（2007）が述べているように、児童は自由研究を行う過程で、段階的に意欲が低下してくることはしばしばみられる。また、もともと児童は自由研究に対する問題意識は希薄であることから、何らかの形で研究テーマが児童以外の誰かに示される場合が多いとしている。こうした指摘は本調査結果にも当てはまることで

ある（図３）。その結果、子供は自由研究を遂行するために、誰かのサポートを要求することとなる。実際、小・中学生が一人で研究を進めることは困難であるため、６割近くの親が何らかのサポートをしているとされる（林・三崎 2016）。

では、子供をサポートする人は誰が適任なのであろうか。本来ならば、一番適任なのは普段一番身近にいて専門的知識や経験を持っている教師であると思われる。しかし、その役目を教師は果たしていないことが本調査から明らかとなった（図３、４）。その原因としては、夏休みの自由研究は夏休みに行われるのだから、先生が近くにいて指導することは困難な状況にあると考えられる。しかし、児童は夏休みの始めと終わりにプール教室などで登校することも多い。こうした日に自由研究の指導をすることはある程度可能なように思われるが、そうした事例は決して多くない。むしろ、自由研究そのものが現行の学習指導要領には明記されていないことから、教師サイドとしては家庭教育の一環として位置付けているのかもしれない。しかし、家庭で指導を丸投げされた親にしてみれば、不安な気持ちを抱くのは無理のないところである。学校として自由研究を義務として課すならば、役割を今一度見直す必要があるであろう（海野・安藤 2007）。

現状としては家庭教育の中に夏休みの自由研究を位置付けて、子供たちをサポートしていくしかないわけであるが、具体的にはどうしたらその目的を達成できるであろうか。一般に、夏休みの理科自由研究のレベルは子供の学年が上がっていくにつれて高度な内容となる。文系親が理系親と同等の知識やスキルがあれば、子供たちの多様な要求に答えていけるかもしれないが、なかなかそれも難しいであろう。しかし、小学生の子供を持つ親は自由研究の本来のねらいを理解するなら、子供が自由研究を通じて、科学の素養や最後までやり遂げる強い気持ちを養い、終わった時の達成感を味わえるように親は責任をもって彼らを導かなければならない。自分は文系出身だから子供を導くことに不安があると言って、「形だけ整えて提出すればいい」といった安易な考えに陥るのは親の無責任である。子供が頼れるのは学校よりも親しかいないのである。親たちもそのことに気づいて、わが家の家庭教育で何ができるのかをもっと研究すべきである。

幸いにも現在のインターネット環境を利用すれば、自由研究のテーマの設定、研究計画の立て方、結果のまとめ方、成果の発表の仕方など、自由研究を進めるうえでのノウハウを簡単に入手することができる。しかし、親子がそうした情報をどこまで使いこなせているかとなると疑問符がつく。佐藤・栗原（2016）の「子どもが理科の自由研究を進める上で必要とする指導・支援」と題した論文はインターネットの適切な活用をすれば、文系親であっても理科系の自由研究を指導していける可能性を持たせてくれる。現在の親たちはインターネット環境で十分に生きていける能力を備えている。小学生の子供を持つ親が自由研究を通じて成長するわが子を見たければ、そうした現代の能力を子供のために使うことが必要であろう。

最後に子供が研究を行うときのモチベーションについて考えてみたい。小学生の子供にはまだ集中力や持続力については未熟な場合が多いので、夏休みを通して行う自由研究では親が子供を常にエンカレッジすることとなる。筆者の子供が小学生だったころ、夏休みの自由研究を指導して苦労したことを覚えている。よく覚えているところでは標識再捕獲法を用いて、池のアメンボの個体数を推定したときである。一度捕まえて、ペイントで標識してから逃がして、

再度捕獲することを繰り返した。すばしこくて、すぐに逃げてしまうアメンボを捕まえるのは小さな子供には至難のことだった。どちらかというと飽きっぽい性格だった子供だったが、諦めさせずに研究を続けさせるのに必要だったのはモチベーションをしっかりと植え付けることだった。この子の場合、モチベーションを持たせることは比較的簡単だった。動物の中でも昆虫が好きだったので、このやり方を覚えれば好きな甲虫がどれくらいいるのかがわかるんだよと言っただけだった。その後はコンクールなどで賞をもらうことを目標にして自由研究を飽きずに続けることができた。このように、子供であってもモチベーションが重要であり、それがあれば自由研究を完結できるだけでなく、これをきっかけとして人間としての成長も期待できるのである。モチベーションを植え付けることの重要性についても親は考えるべきである。

【参考文献】

アクトインディ株式会社（2015）「2015年夏休みの宿題に関するアンケート調査」、https://iko-yo.net/press/releases/162（2018年10月５日アクセス確認）.

アクトインディ株式会社（2016）「2016年夏休みの宿題に関するアンケート調査」、https://d2goguvysdoarq.cloudfront.net/system/press_releases/pdfs/214/original.pdf?1469157784（2018年10月５日アクセス確認）.

安藤秀俊（2008）「理科の自由研究における教師の認識に関する一考察」、理科教育学研究 48：127－134.

バンダイ（2013）「夏休みの宿題に関する意識調査」、http://www.bandai.co.jp/kodomo/pdf/question211.pdf#search=%27%E5%A4%8F%E4%BC%91%E3%81%BF%E3%81%AE%E5%AE%BF%E9%A1%8C%E3%81%AE%E9%87%8F+pdf%27（2018年９月20日アクセス確認）.

バンダイ（2017）「小学生の夏休みに関する意識調査」、http://www.bandai.co.jp/kodomo/pdf/question237.pdf#search=%27%E3%83%90%E3%83%B3%E3%83%80%E3%82%A4+%E5%B0%8F%E5%AD%A6%E7%94%9F%E3%81%AE%E5%A4%8F%E4%BC%91%E3%81%BF%E3%81%AB%E9%96%A2%E3%81%99%E3%82%8B%E6%84%8F%E8%AD%98%E8%AA%BF%E6%9F%BB%27（2018年９月20日アクセス確認）.

Benesse 教育研究開発センター（2009）「小学生の夏休み調査 －小学生の保護者を対象として－」、https://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=3266（2018年９月20日アクセス確認）.

eole Inc.（2018）「夏休みの宿題に関するアンケート調査」、http://www.eole.co.jp/pdf/press_20180823.pdf（2018年10月10日アクセス確認）.

林康成・三崎隆（2016）「小学生が夏休みに理科の自由研究に取り組む意識と科学リテラシーに関する実態調査」、日本科学教育学会研究会研究報告　30：63-66.

科学技術庁科学技術政策研究所（1992）「日・米・欧における科学技術に対する社会意識に関する比較調査」、平成２・3年度科学技術振興調整費調査研究報告書.

ライオン（2013）「夏休みの「自由研究」に関する意識調査」、https://www.lion.co.jp/ja/company/press/2013/887
（2018年８月27日アクセス確認）.

文部科学省（2018）「平成30年度学校基本調査」、http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k_detail/1407849.

htm（2018年８月20日アクセス確認）.
日本能率協会産業センター（2018）「夏休みの自由研究、親の９割が「不安あり」」、https://jma-news.com/wp-content/uploads/2018/07/74586605cf0d411ead49bbc6bfaec20b-1.pdf?_ga=2.47176295.1538961529.1532309412-1512439970.1520929827（2018年 9 月20日 アクセス確認）.
岡本信司（2008）「一般市民の科学的リテラシーに関する分析と考察」、研究技術計画 22:172-187.
佐藤綾・栗原淳一（2016）「子どもが理科の自由研究を進める上で必要とする指導・支援―ウェブ検索解析と小・中学校教科書の比較から―」、教材学研究　27：143-150.
週刊女性 PRIME（2017）「自由研究の工作代行は３万円！夏休みの宿題代行サービスに200円超の依頼殺到中」、2017年９月5日号、http://www.jprime.jp/articles/-/10441（2018年９月20日アクセス確認）.
海野桃子・安藤秀俊（2007）「理科の自由研究の系譜と附属小学校における児童の意識」、日本科学教育学会研究会研究報告　22：99-102.
山崎英則・片山宗二（2003）「教育用語辞典」、ミネルヴァ書房、253.